

書 評

松岡光治編著

『ギッシングを通して見る後期ヴィクトリア朝の
社会と文化』

(溪水社、2007年)

橋野 朋子

本書は、編者松岡光治氏が、2003年にギッシングの没後100年を記念して出版した『ギッシングの世界－全体像の解明をめざして』（英宝社）に引き続き、2007年の生誕150年を記念して出版したものである。ギッシングの研究書であることは一目瞭然であるが、タイトルにいうように、本書のテーマはあくまでも「後期ヴィクトリア朝の社会と文化」であり、読者対象はギッシング研究者に限らない。読者は、この一冊から、主として後期ヴィクトリア朝の文化的、社会的背景に関する包括的な知識を得ることができるであろう。それだけ本書で取り扱われているテーマは多岐にわたっているものであり、その情報量はかなりのもので、通読した際には相当な読み応えを実感する。

本書は、大きく「社会」「時代」「ジェンダー」「作家」「思想」の5部から構成され、そのそれぞれが異なる研究者による5つの論文から成り、各論文はすべて4節から論じられるという整然たる統一感のもと編集されている。松岡氏が特別寄稿を依頼したピエール・クスティヤス氏、ジェイコブ・コールグ氏、パウア・ポストマス氏、小池滋氏、富山太佳夫氏、グレアム・ロー氏のほか、ヴィクトリア朝研究の第一線で活躍している研究者がそれぞれの専門を生かしたテーマで論を展開している。本書は読者個人の研究テーマに応じて必要な部分を独立して活用することも可能であり、また通読した場合でも、専用ウェブ・サイトを通して執筆者全員がお互いの執筆内容を確認できるシステムをとっていたというだけに、内容の重複が避け

られ、かつ同時に、キー・ワードとなるような言葉や事柄には統一がとれている。序章にはギッシング研究の権威であるピエール・クスティヤス氏による「ギッシング小伝」が付されており、ギッシング研究の門外漢であってもこの序章を読むことにより、ギッシング作品を理解する上で鍵となるギッシングの生い立ちや人生経験を一通りインプットしてから本論に臨むことができる構成となっている。

「教育」「宗教」「階級」「貧困」「都市」の5つの章から成る第1部「社会」には、ギッシング個人の‘教育’や‘階級’へのオブセッションや、ギッシング作品に描かれる‘貧困’‘都市’といった、ギッシング作品を理解する上で不可欠な社会的背景知識が凝縮されている。また、‘貧困’を描く上でギッシングが‘宗教’に関わる明確な言説を避けていることを指摘する「宗教」の章では、ギッシングの描く‘貧困小説’を理解する上で重要となる金銭と経済にまつわる事象が詳述されている。

第2部「時代」では、技術や科学の進歩に伴う価値観の変化など、ヴィクトリア朝後期ならではの時代背景が考察の対象となっている。19世紀末の科学をめぐる言説、および世紀末に流布した犯罪学をめぐる言説の中でギッシング作品を読み解いた「科学」および「犯罪」の章、後期ヴィクトリア朝における定期刊行物市場と出版形態の変貌を概観した「出版」の章、先輩作家として最も影響を受けたディケンズとの比較を中心に論じた「影響」の章、ギッシング作品において理想的に描かれている‘地中海世界’と‘南イングランド’の表象を通してギッシング自身の英国人的な気質を検討した「イングリッシュネス」の章から成っている。

第3部「ジェンダー」は、「フェミニズム」の章においては‘新しい女’をめぐる、「セクシュアリティ」の章ではギッシング自身が生み出した言葉である‘性のアナーキー’をめぐる、それぞれギッシング作品における女性の問題を考察し、「身体」の章は作品の随所に反映されたギッシングの身体意識を医科学言説との関わりから検証している。「結婚」の章においては、結果として結婚や女性の役割の正当性が揺らぎながらもそれに代わる理想的な形が見出されることのないギッシング作品における結婚観、家庭像が論じられている。「ジェンダー」の最終章では、「女性嫌悪」のタイトルのもと、女性の進出という社会現象を受けて、父権制を批判しつつも

‘女性’に対して旧来的な価値観を捨てきれないでいる男性主人公たちの複雑な心理が分析されている。

第1部から第3部がギッシング作品に反映された社会的・文化的背景を考察するものであるのに対して、第4部は、作家ギッシングという観点から作品を見つめるものである。「自己」「流謫」「紀行」「小説技法」「自伝的要素」の各章において、‘個人主義’を標榜しつつ空洞化の意識に脅かされ続けた作家の‘自己’、ギッシング作品の特徴ともいえる‘エグザイル’意識、紀行文に見られるギッシングにとっての古典の世界、伝統的要素と革新的要素が混在した小説技法、書く自分と書かれる自分の乖離といった事柄が論考の対象となっている。

最後の第5部「思想」は、「リアリズム」「ヒューマニズム」「審美主義」「古典主義」「平和主義」という様々なイデオロギーからギッシングという人間像を考察したものであり、そこからは、芸術、知性といったものに対するギッシングの精神的な思想が読み取れる。

それぞれ異なる研究者によるこれら25本の論文は、全体を通して共通した一つの印象を浮かび上がらせる。「(ロンドンは) 幻滅の都市であると同時にその幻想的な魅力と知的な刺激が彼を引きつけてやまない創作活動の磁場であった」(第5章96頁)、「ギッシングは必ずしも当時の『退化論』に芯から浸っていたわけではないが、少なくとも前向きな『進化』を信じる人ではなかった」(第6章126頁)、「変貌する文学市場とその物語形式への衝撃に対するギッシングの矛盾した反応」(第8章163頁)、「両義的なイングリッシュネス」(第10章190頁)、「(ギッシングは) 多くの公的問題に関して奇妙に相反する態度を示していた」(第15章286頁)、「語り手はどちらにも共感しているように見えながら、結果的には、どちらにも距離を置いているように見える」(第13章252頁)、「イタリアの古い歴史と文化に対する彼自身の両面的な態度」(第18章331頁)など、異なった研究者たちによるこれらの指摘は、どんな事柄に関しても見受けられるギッシング特有の‘両面価値感情’を浮き彫りにし、研究対象としてのギッシングの一筋縄ではいかない魅力を読者に改めて認識させる。「彼は教育、階級、女性、結婚、金銭をはじめとする様々な問題に矛盾した感情を抱き、その激しい葛藤に絶えず苦悩していた」(第5章96頁)と松岡氏は述べる。苦学の末オーエン

ズ・カレッジでの授業料免除を受け、古典の大学教授としての将来を期待されていた矢先に、街の女‘ネル’を更生させるためとの信念から窃盗を働き退学処分 / アメリカでの逃亡生活 / ‘ネル’との結婚生活が悲惨な最期を遂げたにもかかわらず、教養があっても金のない男は中産階級の女性と結婚できないという悲観的な自己否定から再度、無教養な女性と結婚 / 自分と知的レベルを共有できる女性への憧れを捨てきれずに妻を見放し中産階級のフランス女性との重婚を決意しフランスで生活 / 郷愁の念にかられながらも故国への帰国を果たすことなく46歳という若さで異邦の地で客死・・・本書を通して伝えられる波瀾に満ちたギッシングの生きざまは、一つの時代を生きた作家の人生模様として、研究者に限らず、一般の人にとっても大いに興味深いものであろう。

また、「文化」と「教養」に対するギッシングの一途なまでの傾倒は本書が全編を通じて読者に与える最大の印象である。松岡氏は「まえがき」において「少子化に苦しむ現在の日本では、生き残りをかける大学の大半が実社会で役立つ人材の育成に重点を置くあまり、実践能力を身につける専門教育を優先して、幅広い視野と複眼的な思考力や判断力を育成する教養教育をなおざりにしている」(v)と述べているが、事実、検定英語対策などのプラクティカルな内容の授業が学生にもてはやされる昨今では、リーディングの授業などでも‘パラグラフ・リーディング’や‘スキム・リーディング’などといったリーディング・スキルを中心とした演習が大学側から求められ、文学的な教材が敬遠されるのが現状であり、大学教育の現場にいる文学研究者の多くが板挟み状態にあると言える。並木幸充氏は、第24章「古典主義」において「ギッシングは・・・古典や教養というものを当時の実利社会、功利的社会から逃れる避難所としてばかりでなく、むしろそうした非人間的社会にこそ必要な精神的支柱のようなものとして作品内に投影しようとした」(441頁)と述べている。ヴィクトリア朝後期という様々に価値観が揺れ動いた時代を生きたギッシングの一徹な‘精神性’、‘教養主義’を、現代の我々は再認識する必要があるであろう。

第2章「宗教」において富山太佳夫氏が「経済基盤の変化に目を向けることをしないヴィクトリア時代の小説の研究には、教養小説論であれ、社会小説論、心理小説論、フェミニズム小説論の何であれ、私には何の関心も

ない」(52頁)と述べているように、文学研究において、とりわけヴィクトリア朝のように様々な事柄が変化を遂げた時代においては、作品を論じる上で社会的、文化的な時代背景にまつわる知識は不可欠となる。その意味においても、本書は貴重な資料であり、多岐にわたる専門分野の研究者たちが本書の恩恵に浴すことであろう。目下、松岡氏のもと、ギヤスケル生誕200年を記念して、今度は‘前期’ヴィクトリア朝の社会と文化を考察する研究書が準備中であると聞いている。本書と併せて、伝統と革新のはざままで揺れ動いたヴィクトリア朝時代を多面的に概観する研究の集大成となることは間違いないであろう。